

## 遺跡見学会報告 今金町金山遺構を探索する

日 時 令和5年7月9日（日）10時00分～12時00分

場 所 今金町美利河2砂金採掘跡ほか

参加者 13名

南北海道考古学情報交換会の恒例事業である遺跡見学会を開催しました。今回は今金町で金山遺構、チャシ可能性地、メノウ採掘跡可能性地を見学しました。

参加者は13名、道南だけではなく、札幌近辺からのご参加もいただきました。



図 1.1 ピリカ旧石器文化館前に集合した参加者と、解説する宮本会員

### 1.1 美利河2砂金採掘跡

隣接する美利河1砂金採掘跡はピリカダム建設に伴い調査が行われ、ダム工事によって水没しましたが、美利河2砂金採掘跡では砂金採掘遺構が良好に残されています。

宮本会員（今金町教育委員会）によると、近世の砂金採掘は段丘面上に導水路を構築して上流から水を運び、台地上を水浸しにして土砂を掘削し、旧河床の砂金を採掘するのだそうです。



図 1.2 砂金採掘の方法について解説する宮本会員

砂金採掘跡には流路に沿って石積みが見られます（図 1.3）。意図をもって石を積むというよりも、掘削中に出土する大型の礫を脇に取り除いただけのもので、石垣のような安定性はないそうです。安易に乗ると簡単に崩れて怪我をする恐れがあるとのことでした。

蝦夷地の砂金採掘は松前町大沢川を皮切りに、知内川へと移行し、後志利別川流域は最も後になって採掘が行われるようになったようです。後志利別川沿いの砂金採掘は1669年頃には終焉を迎えていたようです。

砂金採掘跡はおおよそ定型というものがないように見えます。溝状に掘り進むものとは異なり、すり鉢状に地面を掘りくぼめ、土砂を堆積して砂金を採掘することが行われたのではないかと推測されます（図 1.4）。

今金町教育委員会ではこのような砂金採掘遺構の分布域約 33,000 m<sup>2</sup>を町指定史跡として指定し、整備作業や記録保存調査に取り組むとのことでした。





図 1.3 砂金採掘跡の石積み



図 1.5 チャシ跡可能性地の試掘調査地点 A



図 1.4 すり鉢状の砂金採掘跡



図 1.6 堀切の中に立つ宮本会員

## 1.2 試掘調査地点 A

今金町教育委員会が調査中のチャシ可能性地の一つを見学しました（図 1.5）。昭和 23 年米軍撮影航空写真から判読した堀切状の地形の断面確認が行われました。現時点では明確に遺構と断言できるものはなく、自然地形の可能性が高いとのことでした。

## 1.3 試掘調査地点 D

険しく狭い尾根を登って試掘調査地点 D を訪れました。こちらはチャシ可能性地であるほか、メノウ採掘跡の可能性のある遺構が確認されています。

狭い尾根上に堀切状の溝が現れました（図 1.6）。これは人為的な構造物に見えます。

堀切を抜けて少し行くと斜面を「コ」字形に掘り込んだ遺構が見えてきます（図 1.7）。戦後にメノウを掘り出したことがあるそうです。金テコで地面を突き刺し、固いものがみつかったら掘り起こすという小規模な掘削だったようです。



図 1.7 「コ」字形に掘り込まれた遺構

## 1.4 まとめ

今金町教育委員会では道南では初となる文化財保存活用地域計画を策定し、令和 4 年 7 月に文化庁から認定されました。地域計画に基づいて町内の遺跡を探索して記録を残し、史跡指定などの法的な網をかけ、整備を行うという文化

財保護の王道ともいえる作業を着実に進めています。このような、一見地味な作業をたゆまず進めていることが非常に印象に残りました。

広大な面積をもつ砂金採掘跡の全貌をどのように把握し、記録するのか、方法論や手法についても様々な可能性が考えられます。今金町教育委員会では、航空 LiDAR 測量やモバイルスキャンも視野に入れて記録を残そうと考えているようです。限られた条件下でいかに適切な記録を残すのか、今金町教育委員会の取り組みから学ぶことが多いと感じました。

(記録：石井淳平)